幼稚園における教育課程編成の実際 ——教育要領の改訂と、5領域に着目して——

三島 秀晃・溝口 綾子

帝京短期大学 こども教育学科

【抄録】

【問題・目的】幼稚園は、幼児の発達を促すために意図的、計画的に教育を行う場である。幼稚園の教師は、幼児とともに生活しながら幼児が発達に必要な経験を得られるように援助していく重要な役割を担っている¹⁾。そこで、幼稚園における教育課程の編成は入園から修了までの全教育期間を見通し、幼児の生活経験や発達を基に具体的なねらいや内容を組織していく。本研究では教育課程の編成の実際と結果を考察するものである。

【方法】調査対象園の教師と、筆者とで教育課程の在り方に共通認識を持てるように研修会を重ね、その後過去3年分の週日案や保育記録をもとに互いに教育課程案を編成した。そして、その二つを照らし合わせ、5領域のねらいや幼児教育において育みたい資質・能力²⁾など、教育要領の改訂に伴い必要なねらいと内容が適切に組み込まれているか、検討会を通して確認し、教育課程の編成を行った³⁾。

【結果】各年齢の期によって、教師の育ってほしい、体験してほしい「ねらい」に偏りがあることが分かった。その結果を踏まえ、教師と検討した結果、「期」に応じた子どもの姿を踏まえ必要な「ねらい」は学齢によって様々であり、もちろん全領域の「ねらい」を踏まえて教育課程や指導計画案を立案することが前提であるが、5領域の中でも「この期」には、特に「このねらい」に留意して指導を行うなどということが子どもたちの主体的で対話的な深い学びにつながるのではないかということが明らかになった。

【考察】教育課程の編成はその時期の子どもの実態に応じた指導を行う上での具体的なねらいと内容を導き出すことであるが、本幼稚園以外の教育関係者(今回の研究においては、筆者である2名)が加わることによって、「ねらい」を説明する上での「根拠」を説明できるようにすることで、よりねらいと内容が明確化された。逆に「根拠」を明確化するために、自分の考えが本当に適切であるかを考え、主体的に他者の意見を聞こうとする姿も見られたことは、チーム幼稚園としての、連携にもつながったと考えられ、良好な幼稚園運営を行っていく上での有用な情報に提供するものと考える。

【キーワード】幼稚園、教育課程、5領域

I. はじめに

平成10年(1998年)に、「幼稚園は子どもが出会う初めての学校である」というキャッチコピーが文部科学省から保護者向けに出されている。すなわち、幼稚園は「学校」という位置づけではあるが、小学校以上の学校教育とは異なり、教科書を使わないで、幼稚園の生活や遊びを通して学習するという意味あいである。このような学習が学校教育の基盤に繋がっていく。つまり、幼児期の子どもは日々の生活の中で、自分の周囲のあらゆる環境(ひと、もの、こと)に出会い、大きな好奇心を抱いてそれらへのか

かわりを通して様々な体験から学び成長していく。これは、幼稚園のみではなく家庭、地域社会と連続的に営まれていく生活の中で積み重なっていく様々な経験によって促される。一方で、現状の幼児を取り巻く環境は幼児の発達にとって十分な環境とはいえない。例えば、思い切り遊べる空間や時間、友だちと関わることのできる環境は大きな意味がある。このような環境を十分に保障し、幼児が健全な生活を営める場として幼稚園の役割は重要である。

幼稚園は、幼児の発達を促すために意図的、 計画的に教育を行う場なのである。そこで、幼 稚園の教師は、幼児とともに生活しながら幼児 の生活する姿を見守り,幼児が発達に必要な経験を得られるように援助していくという重要な 役割を担っている。

幼稚園においては、学校教育法、幼稚園教育 要領に基づいて、小学校以上の学校教育と同様 に教育の全体計画である教育課程の編成は欠か せない。前述しているように, 幼稚園教育は日 常の生活を大切にして教師と幼児がともに過ご しながら教育を進めるということは、当然、学 習指導要領に基づいて授業内容や授業時数との 関連において組織されている学校教育の教育課 程の編成とは異なるものである。幼稚園におい ては入園から修了までの全教育期間を見通し, 幼児の生活経験や発達を基に具体的なねらいや 内容を組織していくことが必要である。幼稚園 の教育課程について, 幼稚園教育要領解説には 「幼稚園教育の目的や目標に向かってどのような 道筋をたどって教育を進めていくのかを明らか にするため、幼稚園教育において育みたい資質・ 能力を踏まえつつ各幼稚園の特性に応じた教育 目標を明確にし、幼児の充実した成果を展開で きるような計画」と説明している。

帝京幼稚園(以下本園という)では、創立以来の教育方針、教育目標は明確に掲げられているが、明文化された教育課程は存在しない。そのため、教師一人ひとりは本園の教育方針や教育目標の意味するところをあいまいにして、それを日常保育に十分に生かすことが出来ない現状が散見される。しかし、年月とともに社会状況は変わり、年々入園してくる幼児の姿にも変容がみられるようになっている。そこで、本園の教育課程を編成することによって、本園の教育課程を編成することによって、本園の教育課程を編成することによって、本園の教育課程を編成することによって、本園の教育課程を編成することによって、本園の教育課程を編成することによって、本園の教育課程を編成することによって、本園の教育課程を編成することによって、本園の教育について教師間の共通理解を図り、共有意識を持って保育の質を高めていくことが必要と考える。

本研究においては、本幼稚園の教育方針、教育目標を踏まえた教育課程編成の実際とその結果を考察することを目的とする。

Ⅱ. 方法

1. 調査対象者

学校法人帝京大学帝京幼稚園 2021 年度在職の教員(12名)

2. 調香時期

2021年3月1日~2021年9月30日の間に実

施をした。

3. 調査内容

- (1) 教育課程編成の意義・目的⁵⁾・方法についてパワーポイントを使って研修会をもつ。参加者は、本園教師と本園在職経験のある大学教員A(以下教員Aとする)と学校法人冲永学園現職園長の大学教員B(以下教員Bとする)。
- (2) 対象園の学年ごとに,過去3年(2017~2020)の指導計画(週案,日案)と保育記録から幼児の実態を時期ごとに抽出してまとめる。
- (3) 上記「(2)」を基に各学年の「発達の過程」と「年間のねらい」を設定する。
- (4)「発達の過程」と各時期の「子どもの実態」から年間の「期」を設定する。
- (5) 各学年の「期のねらい」ごとに具体的な「ねらいと内容」を導き出す。
- (6) 上記「(5)」について 5 領域との関連性を確認する。
- (7) 上記「(3)~(6)」と本園の教育方針・教育 目標との整合性を確認する。

教育課程の作成

- ・学校教育法第23条により、幼稚園の教育目標を達成するため に「教育課程」を作成するよう定められています。
- 「教育課程」とは
- 各幼稚園の特性に応じた教育目標から、幼児の充実した生活 を展開できるような計画
- 職員一同が、統一性のある保育ができるように、 そしてそれを保護者にも伝えられるようにすることを 目的としている。

A 11 44

Figure 1. 教育課程編成の目的

具体的にどの様な手順を踏むか

- 1,各学年の、週日案の子どもの実態(3年分以上)から期に分けた各学年における教育課程案を編成する
- 例)3歳児の1期の姿から、発達の過程を導き、年間のねらいの設定→期の設定→ねらいと内容の設定
- 2, その時期に育みたい資質能力、学んでほしいこと、教育目標、5領域、10の姿を踏まえ、ねらいと内容を作成する
- 3,作成したものが、幼児の心身の発達、幼稚園の実態、 地域の実態に則しているかを確認する

Figure 2. 教育課程編成の手順

(2) 本園過去3年分の指導計画(週案,日案) 子どもの実態記述の確認とその時期に体験して ほしい,育ってほしい項目の洗い出し

調査対象園における,2017年度から2020年

度の指導計画案を現在担当している学年の教職 員が読み直し、年間の子どもの姿(実態)の節 目を捉え、今後も取り入れていきたい「ねらい」 と「内容」を月ごとに洗い出し、記録していく。

その期に応じた「ねらいと内容」が,教育目標,本園の特徴に準じているかを教員 A が確認をする。

(3)「期」の設定と、教育目標の整合性の確認

本園に適した「期」の数と、時期の設定を教師と共に確認をし、5期とした。

その後、各学年の「5期」に分けた「ねらいと内容」が「5領域」の、「健康」、「人間関係」、「環境」、「言葉」、「表現」の「ねらい」と「内容」に対して適しているか、そして偏りがないかを「幼稚園教育要領解説」 をもとに作成したチェック項目をつける資料(table 1 から 5)から、各学年の教職員と教員 A で確認をし、「教育課程案」を編成する。

(4)「教育課程案」の添削と再確認

「教育課程案」が「幼稚園教育において育みたい資質・能力」、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」 7 に準じているかを教員 A と教員 B で添削をする。

その後、仕上げたものを「教育課程」とし、 教職員に最終確認をする。

4. 倫理的配慮

調査対象園の管理責任者に対し、本研究の目 的や概要および研究で得られた結果は学術的目 的以外には使用しない旨を記載した書面を示し たうえで説明を行い、同意を得た。

Ⅲ. 結果

1. 教育方針と教育目標

(1) 教育方針

本園の保育方針は創設以来変更されていな かったが、今回の教育課程の編成に伴い現状を 踏まえ見直し、一部改訂した。

1) 改訂前

帝京幼稚園は、学校教育法に基づいて、適切な教育的環境のなかで保育し、<u>心身ともに健や</u>かな明るい良い子に育てます。

2) 改訂後

本園は、学校教育法に基づいて、適切な教育 的環境のなかで保育し、<u>心身ともに健やかで明</u> るくのびのびと元気な子どもを育てる 下線の部分を改訂した理由は「明るい良い子」の概念が曖昧であり、明るいことが良い子という文言が文部科学省の示す改訂後の幼稚園教育要領の幼稚園教育の基本に準じていないと考えられたからである。そこには「幼児の主体的な活動を促し、幼児期に相応しい生活が展開されるようにすること。」、「幼児一人一人の特性に応じ、発達の課題に即した指導を行うようにすること。」この内容に準じるには、「良い子」に育てるというよりも、「明るくのびのびと元気な子ども」を育てるという表現の方が適切であると考えられたからである®。

(2) 教育目標

「教育方針」と同じ理由から教育目標も一部改 訂をした

1) 改訂前

- ○健康にして、明朗快活なる日常習慣を養う
- ・身体が丈夫で元気な子
- ○人への愛情や信頼感を育てる
- ・友だちと仲良く遊べる子
- ○日常生活の中で言葉への興味や関心を育て る
- ・<u>自分の考えをはっきり述べ</u>,人の話しも聞ける子

○いろいろな体験を通して、豊かな「思考力・ 創造性」を養う

・物事に興味を持ち、意欲的に取り組める子

2) 改訂後

- ○健康にして,明朗快活なる日常習慣を養う 「身体が丈夫で元気な子」
- ○人への愛情や信頼感を育てる

「友だちとかかわって遊ぶことを楽しむ子」

○日常生活の中で言葉への興味や関心を育て る

「自分の考えを伝え、人の話も聞ける子」

○いろいろな体験を通して,豊かな「思考力・ 創造性」を養う

「物事に興味を持ち、意欲的に取り組める子」

下線の部分を改訂した理由は「仲良く」という表現よりも、「友だちとかかわって遊ぶことを楽しむ子」という表現の方が、幼稚園教育要領の「幼稚園教育の基本」に準じていると考えられるからである⁹。「はっきり述べる」という表現も、一人一人の特性に応じるのであれば、「自分の考えを(自分なりの表現方法で安心して)伝える」方が、「安定した情緒のも下で自己を十

分に発揮する」ことができると考えられるから である¹⁰⁾。

2. 本園の特徴

本園の特徴は、幼稚園教育要領解説「教育課程の編成上の留意事項」¹¹⁾ と、グループ園の教育課程編成の踏襲 ¹²⁾ に基づき、「入園から修了までの生活」や、「安全上の配慮」、「小学校教育との接続」などに留意し、本園の特性を、保護者が見通しをもって理解することができるように編成した(table 6) ¹³。

3. 発達の過程と年間のねらい

「発達の過程」については、昨年度までの累積された指導計画(週案、日案)と保育記録から子どもの実態の記述を分析、検討する。その結果、各学年の各月の実態から子どもの生活する姿と教師の願いが明確になり、さらに年間を通してみるとそこには発達の姿に節目が捉えられる。そこで、子どもの実態は年間を5つの「期」でまとめることができる。この年間の5つの期の子どもの実態を生活面、遊びや友だち関係の視点で絞り込み、各学年の「発達の過程」を導き出した。

この「発達の過程」と各期の「ねらいと内容」とを重ね合わせ、各学年の「年間のねらい」を2つの柱として設定した(table 7)。

4. 教育課程

教育課程を編成するに当たっては、前述の1~3を踏まえ、関係法令(学校教育法、幼稚園教育要領、幼稚園設置基準)や本園を取り巻く地域環境の実態、本園の抱えている課題を洗い直して編成した¹⁴⁾ (table 8 から 10)。

Ⅳ. 考察

編成された「教育課程 (table 8 から 10)」の 「学年の目標」をピックアップし、考察をしてい く (table 1, 2, 3)。

1,3歳児学年の考察

- 〈3歳児年間のねらい〉
- ○幼稚園での生活の仕方が分かり,安心して 過ごす
- ○保育者や友だちと好きな遊びを存分に楽し む

見通しとしては、「保育者に安心感を抱き、幼稚園で過ごす時間の目安を3歳児なりに理解で

きるようにする。」これは、自分の興味関心のあるものが、いくら近くにあっても、「保護者がいつ迎えに来てくれるのか」がわからなければ、安心して遊ぶことは困難であるという前提である。それと同じで、子どもたちも保護者が迎えに来る見通しを持ち、その子なりに自分のペースで遊べるように保育者は指導すべきであるもの、室内または園庭遊びをして、絵本や紙芝居、パネルシアターなど保育者によるお話が終わったら保護者の迎えが来るなど、年齢に応じた教育時間の見通しをもてるようにすることが必要である。

友だちとの関わりについては、「一緒に遊ぶ」という表現ではなく、あえて「同じ遊びを共有する面白さを味わう」というねらいにした。その理由は同じ場所で遊んでいても、楽しんでいる中身は違うことが多い。そこでⅡ期のねらいでは「同じ遊びを共有する面白さを味わう」とした。しかし、それは、彼らが発達段階として、「一人で遊びこむ」面白さを体験している重要な時期だからではないだろうか。

そのようなねらいに際する考察を踏まえ、三歳児の教育課程には、自然に触れることや、様々な素材を使い遊ぶことや、身の回りの支度など、自分の興味のあることを、保育者に見守られながら存分に楽しみ、同じクラス環境で同じように自分のペースでのびのびと過ごすクラスメイトがいて、4期、5期を目標に、「友だちと一緒に遊ぶ面白さを味わう」意識が持てるように指導を行うと良いのではないかと考えられる。

2, 4歳児学年の考察

- 〈4歳児年間のねらい〉
- ○自分の思いを伝えたり、相手の思いを聞い たりする
- ○身体を存分に動かして遊び,安全で健康に 過ごせるようになる

四歳児については、三歳児で自分の存在や、 行動を保育者に認められ一人一人が自分の思い を素直に表現する経験を重ね、その後今まで以 上に、自分以外の人間に興味関心を抱き、自分 の主張をしながらも、相手の思いや考えを聞き、 否定をしたり、共感したり、驚いたりしながら 他者の考えを聞く面白さを知ることをねらいと した。そして、そこにはやはり保育者の関りが 必要であり、時には保育者と二人きりで考え、時には保育者と友だちとみんなで考え、時には クラスで話し合ったりする経験をし、「自分とは 違う考えがあることは当然で、それは考え方に よっては非常に面白いのではないか」となれば、一人一人が、個性を認め合い、関わりかたを考えるのではないだろうか。そして、グループ活動や、当番活動を取り入れることで、自分の役割を意識し、目標を達成しようとする意欲が向上することを目指し、環境設定をする必要がある。

そうして、友だちと一緒に一つの目標に向かってともに協力し、意見を言い合いながら達成することの気持ちよさを味わえるようにすることも重要なねらいのひとつである。

食育に関しては、芋ほりや、餅つきなど皆で 楽しめるものはもちろん、絵本やパネルシア ター、制作などを通して子どもたちが「食」に 興味を持ったそのタイミングで、できる「食育」 を意識した遊びを提案、展開できるようにする ことも重要であることが話し合われ、ねらいと 内容が編成された。

3,5歳児学年の考察

〈5歳児年間のねらい〉

○健康に過ごせる方法を学び, 見通しをもって生活をする

○自分に自信を持ち、友だちの良さに気付く ようになる

五歳児のねらいには,「就学」を意識したもの が多くあげられた。その理由としては、やはり 就学への「見通し」が持てていない子が多いの ではないかという意見も教職員との話し合いの 中から気づくことができた。その要因として, 保護者に「もうすぐ小学生になるのだから、○ ○していてはだめだよ」や、「小学校に行ったら、 勉強をいっぱいしないといけない」など、「○○ しなければいけない」という表現の言葉を言わ れている現状がある。それは、送迎で園に来た 保護者の子どもへの言葉がけや、子どもが保育 中に友だちに言っていることから知ることがで きた。もちろん期待感を得られる様な声がけや 促しもうけてきているものの、彼らにとっては、 不安要素の方が勝ってしまっている可能性もあ る。だからこそ、教師は、子どもたちが就学へ の適切な見通しが持てるように,成長すること

の喜びを味わえる環境設定や援助を行うことが必要だと考えられる。例えば、小学校との連携として、交流会を数回計画し、小学生と一緒に遊んだり、体験授業をうけたり、小学校を探検したりと幼小連携を4期のねらいに入れ、子どもたちが就学に見通しを持ったうえで、期待感を持てるようにすることが重要であると考えられる¹⁶⁾。

なお地域の図書館や、高齢者施設、公園などに足を運びその場に応じた振る舞いや、言動を 友だちや保育者と考えながら社会性を身に付けていくことも3期のねらいに組み込んでいる¹⁷⁾。 4期ではその様な経験の中で、自分自身の健康にも留意し、安全な玩具、遊具の使い方や、手洗いうがいなどの衛生面に対しても主体的に実践できるようになる体験を多く取り入れていくことも組み込んだこと等を総合して、五歳児の年間のねらいの要点である。

4, 総合考察

今回各学年の教職員と, 教員 A が学年ごとに 調査対象園でディスカッションをした際に、教 職員が作成した教育課程案は「5領域のねらいと 内容チェック表 (table 1 から 5)」をもとに各学 年の各「期」に5領域のねらいと内容がどのよ うに分類されているかを確認したところ興味深 い結果が表れた。三歳児の1,2期には主に「人 間関係に」関する事項が多く,逆に「言葉」と 「健康」に関する事項が少ないことが分かった。 理由としては、入園して間もない時期から、ま ず保育者に対して安心感を抱いたり, 周囲の子 どもに不安感を抱かないようにしたりと,子ど もたちの情緒が安定できるように保育者は特に 留意し、環境を構成することから分類としては、 「人間関係」にかかわるねらいが多くなったと考 えられる。「言葉」と「健康」に関してももちろ ん発達に応じたねらいは立案しているが、子ど もたちが主体的にというよりは、保育者が主導 しながら安心して一緒に取り組めるようにする ことで、その後主体的に考えたり工夫したりで きるようになることを目指している。結果とし ては「言葉」と「健康」の領域のねらいが「人 間関係」に対して少なかったのではないかと考 えられる。

四歳児の3,4期には「表現」と「人間関係」 に関する事項が多く、「健康」に関する項目が比 較的少ない結果となっていた。これは、3、4期には、運動会や、作品展、芋ほりなど友だちと一つの目標に向かって何かをやり遂げようとしたり、その際に自分の思いを伝えたり、相手の思いに共感したりする機会がより多くなることからこのような結果にいたったのではないかと考えられる。グループ活動やクラス単位での発表などで自分なりに思いや考えを発表するためには、三歳児の間に特に「人間関係」の領域を意識し、保育を展開していく必要があるのではないかと考えられた。

五歳児の年間を通しての結果に関しては,「健 康」や「言葉」が全体的に見て少し多くみられ, あとは比較的5領域のねらいが組み込まれてい たという印象である。もちろん学齢が上がるに つれて, 生活習慣, 友だちとの関わり方など安 心して行うことが主体的にできるようになって いるが、周りを見る力や、理解力が培われてき ているからこそ,就学への過度な不安がそれぞ れ生まれる時期でもあるのかということが話し 合いから分かった。その不安要素は、それぞれ で,「新しい場所で友だちできるかな」や「給食 時間内に食べられるかな」、「ずっと勉強するの かな」などであり、子ども同士その不安を共有 し合ったり、保育者に相談したりと、五歳児だ からこその課題がここで明確になってきている と感じられた。そこで、今回の教育要領の改訂 に伴い記された文言のひとつ「見通し」という 言葉に着目し,小学校との連携や,地域との関 わり方を見直し、自分と他者は違う考えがあり、 その違いを否定するのではなく, そこに興味を 持ったり、時には疑問を持ったりしながら互い に考え, 工夫しながら幼稚園生活を送っていか れるように「見通し」を持って、指導を展開し ていく必要性があると考えられる。今回の5領 域での分析で留意しなければならないことは「領 域」の意味を再確認することである。「領域」と は子どもの経験を体系化したものではなく、子ど もの発達の側面から5つに編成している。そこで 領域別に教育課程を編成したり,特定の活動と結 びつけて指導したりするなどの取り扱いをしな いようにしなければならない 18) 今後の課題とし ては、子どもの姿をとらえ、5領域を基盤とした 幼稚園教育要領の内容を踏まえ、教育課程の見直 しを絶えず続けていくことが重要だと考えられ る。そこで各園に年間予定として組み込まれてい

る「行事」について考えてみる。本来であれば子どもの姿からその時期にあった体験や、関りを経験できるように環境を構成するのだが、法人の方針や、保護者のニーズなどにも対応するために「行事予定」が先に決まっている。その決められた「行事」をいかに教育目標、教育方針、教育課程に準じて行うか、「行事のための保育」ではなく、「保育のための行事」となるように日常保育において子どもたちが主体的に遊びたくなる、挑戦したくなうような指導方法を絶えず研究していくことが必要であると考えられる。

♥. おわりに

教育課程の編成は幼稚園設置基準により、各 幼稚園の全教職員の協力の下に園長の責任にお いて作成されることが義務付けられている。本 園においては、諸処の事情により直近で在職し ていた筆者AとBが法人の理事長の依頼を受け て編成に着手したことを申し述べておく。

本幼稚園は昭和24年(1949年)の創設以来,教育方針並びに教育目標は変わっていない。教師たちはそのことを認識しているものの,実際の保育への活かし方は個々の教師によって違っていた。既に述べているように教育課程は各幼稚園の教育の全体計画であり土台である。すなわち,教育の目標を達成するための教育の基本として位置づけられている。指導計画(長期,短期)の作成は,この教育課程を実際の実践へと具体化していくものであり,担任にとっては指導計画作成の際,拠り所となる。さらにそれは保護者や地域の人々に対して本園の教育に対する姿勢や教育の進め方を示すものである。

本園においては保育の知識やテクニックは個々の教師に多少の差はあるものの,目の前の子どもの姿(実態)を捉えて週案,日案を立案して学年運営で保育を実践してきた。しかし,本幼稚園として目指す教育の道筋を明確にして保育を進めていくことは難しい状況にあった。

この度の教育課程編成により、教師たちはこの数年の実践から本園において入園から修了までの教育期間の全体を通して目指すこども像はどのようなものか、それぞれの発達の時期に育てたいものは何か、そのために教師はどのような指導をし、子どもは何を経験することになるのかを見つめ直し振り返ることにもなったと推

察する。

本幼稚園は、地域環境や幼稚園自体がもっている人的、物的条件は特色を有している。このことは、幼児の生活や発達に影響を与えることにもなるので、今後も幼稚園や地域の実態を把握しつつ本幼稚園の特色を生かし、創意ある教育課程の編成が必要である。

今回,編成された教育課程の実施に当たっては,指導計画(週案,日案)の反省・評価の積み重ねを通して教育課程の評価・改善を行っていくことが必要である。

【謝辞】

本研究にあたり,ご協力いただきました帝京 幼稚園の教職員の皆様に感謝申し上げます。

【引用文献】

- 文部科学省(2018)幼稚園教育要領解説, 116-118
- 2) 前掲(1) 50-51, 145-247
- 文部科学省(2013)指導計画の作成と保育の展開,64-71
- 4) 前掲(1) 4-9
- 5) 前掲(3) 98-101
- 6) 前掲 (1) 145-247
- 7) 学研(2019) 幼稚園教育要領ハンドブック, 8-26
- 8) 前掲(1) 10-21
- 9) 前掲 (1) 26-27
- 10) 文部科学省(1995) 幼稚園教育指導資料第4集一人一人に応じる指導,6-10
- 11) 前掲(1) 84-95
- 12) 溝口綾子 (2008) 幼稚園における教育課程 の編成 - 帝京めぐみ幼稚園教育課程編成の実 際 - 帝京短期大学紀要, No.15
- 13) 国立教育政策研究所教育課程研究センター (2005) 幼児期から児童期への教育, 61-66
- 14) 前掲(1) 282-284
- 15) 前掲(1) 8-9
- 16) 文部科学省 (2019) 幼児理解に基づいた評価, 81-87
- 17) 文部科学省 (2001) 幼稚園における道徳性 の芽生えを培うための事例集, 101-112
- 18) 前掲(1)142-143

Table 1. 5 領域のチェック表 1

領域	ねらい	内容
健康	A、明る動かう。 B、自分で運る。 B、に運動した。 B、に運る。 B、に運る。 B、に運る。 B、で変をして、 B、で変をして、 B、で変をして、 C、に態度通過する。	□1, 先生や友達と触れ合い、安定感をもって行動する。 □2, いろいろな遊びの中で十分に体を動かす。 □3, 進んで戸外で遊ぶ。 □4, 様々な活動に親しみ、楽しんで取り組む。 □5, 先生や友達と食べることを楽しみ、食べ物への興味や関心をもつ。 □6, 健康な生活のリズムを身に付ける。 □7, 身の回りを清潔にし、衣服の着脱、食事、排泄などの生活に必要な活動を自分でする。 □8, 幼稚園における生活の仕方を知り、自分たちで生活の場を整えながら見通しをもって行動する。 □9, 自分の健康に関心をもち、病気の予防などに必要な活動を進んで行う。 □10, 危険な場所、危険な遊び方、災害時などの行動の仕方が分かり、安全に気を付けて行動する。

Table 2. 5 領域のチェック表 2

領域	ねらい	内容
人間関係	をかって、動す感に、 ない	□1、先生や友達と共に過ごすことの喜びを味わう。 □2、自分で考え、自分で行動する。 □3、自分でできることは自分でする。 □4、いろいろな遊びを楽しみながら物事をやり遂げようとする気持ちをもつ。 □5、友達と積極的に関わりながら喜びや悲しみを共感し合う。 □6、自分の思ったことを相手に伝え、相手の思っていることに気付く。 □7、友達の良さに気付き、一緒に活動する楽しさを味わう。 □8、友達と楽しく活動する中で、共通の目的を見いだし、工夫したり、協力したりなどする。 □9、よいことや悪いことがあることに気付き、考えながら行動する。 □10、友達との関わりを深め、思いやりをもつ。 □11、友達と楽しく生活する中できまりの大切さに気付き、守ろうとする。 □12、共同の遊具や用具を大切にし、皆で使う。□13、高齢者をはじめ地域の人々などの自分の生活に関係の深いいろいろな人に親しみをもつ。

Table 3. 5 領域のチェック表 3

領域	ねらい	内容
環境	様々な事象に興も な事像をを関いている。 H、身近から関連を持たり、発見を考えたり、発見を考えたまでは、まれていました。 がは、身近な事象を 「、身近な事象を	□1,自然に触れて生活し、その大きさ、美しさ、不思議さなどに気付く。 □2,生活の中で、様々な物に触れ、その性質や仕組みに興味や関心をもつ。 □3,季節により自然や人間の生活に変化のあることに気付く。 □4,自然などの身近な事象に関心をもち、取り入れて遊ぶ。 □5,身近な動植物に親しみをもって接し、生命の尊さに気付き、いたわったり、大切にしたりする。 □6,日常生活の中で、我が国や地域社会における様々な文化や伝統に親しむ。 □7,身近な物や遊具に興味をもって関わり、自分なりに比べたり、関連付けたりしながら考えたり、試したりして工夫して遊ぶ。 □9,日常生活の中で数量や図形などに関心をもつ。 □10,日常生活の中で簡単な標識や文字などに関心をもつ。 □11,生活に関係の深い情報や施設などに興味や関心を持つ。 □12,幼稚園内外の行事において国旗に親しむ。

Table 4. 5 領域のチェック表 4

領域	ねらい	内容
三日在禾	J、ち現をK、話聞験考話喜し、必わな絵ど葉の気をという。にがに、な言ととや別対のないでした。 たば、ないないでは、ないないでは、ないのでは、ないでは、ないのでは、ないでは、ないのでは、ないのでは、ないのでは、ないのでは、ないのでは、ないのでは、ないのでは、ないのでは、ないのでは、ないのでは、ない	□1, 先生やともだちの言葉や話に興味や関心をもち、親しみをもって聞いたり、話したりする。 □2, したり、見たり、聞いたり、感じたり、考えたりなどしたことを自分なりに言葉で表現する。 □3, したいこと、してほしいことを言葉で表現したり、分からないことを尋ねたりする。 □4, 人の話しを注意して聞き、相手に分かるように話す。 □5, 生活の中で必要な言葉が分かり、使う。 □6, 親しみをもって日常の挨拶をする。 □7, 生活の中で言葉の楽しさや美しさに気付く。 □8, いろいろな体験を通じてイメージや言葉を豊かにする。 □9, 絵本や物語などに親しみ、興味をもって聞き、想像をする楽しさを味わう。 □10, 日常生活の中で、文字などで伝える楽しさを味わう。

Table 5. 5 領域のチェック表 5

	ı	
領域	ねらい	内容
表現	もののの 美力ささる 豊かな感性を もつ。 N、感じたことと を自分なりに	□1, 生活の中で様々な音、形、色、手触り、動きなどに気付いたり、感じたりするなどして楽しむ。 □2, 生活の中で美しいものや心を動かす出来事に触れ、イメージを豊かにする。 □3, 様々な出来事の中で、感動したことを伝え合う楽しさを味わう。 □4, 感じたこと、考えたことなどを音や動きなどで表現したり、自由にかいたり、つくったりなどする。 □5, いろいろな素材に親しみ、工夫して遊ぶ。□6, 音楽に親しみ、歌を歌ったり、簡単なリズム楽器を使ったりなどする楽しさを味わう。□7, かいたり、つくったりすることを楽しみ、遊びに使ったり、飾ったりなどする。 □8, 自分のイメージを動きや言葉などで表現したり、演じて遊んだりするなどの楽しさを味わう。

Table 6. 本園の特徴

- ○帝京大学グループの幼稚園であり、帝京高等看護学院と建物を共有しており、7 階建ての 1, 2 階が幼稚園、3 から 7 階が看護学院という立地である。
- ○帝京大学板橋キャンパスに隣接している。
- 〇遊びを中心とした生活を通して、3歳児から5歳児までの2から3年間を見通した教育を進める
- ○一人ひとりの興味関心に寄り添い、幼児が主体的に遊びこめる環境を構成している
- ○幼稚園教育要領に基づき、教育目標の基盤となる心情・意欲・態度(非認知能力)を身に付けられるように総合的な指導を行う
- ○年間を通して小動物や植物に触れ、命あるものをいたわり、大切にする気持ちをはぐくむ環境を構成している
- ○からだのしくみに興味を持ち、自ら健康にすごそうとする意識が持てるようにすることを目的とし、

帝京大学医療技術学部スポーツ医療チームが子どもたちに直接指導を行っている

- ○幼少連携に基づき、近隣の小学校と連携をとりながら、1, 2, 5年生との交流会を設けている
- ○中学校の職場体験の受入れや、近隣の店と連携をとり、買い物体験をすることで、地域とのつながりを意識できるようにしている
- ○帝京大学グループの高齢者施設と連携をとり、互いにコミュニケーションをとることができる環境を整えている
- ○芋ほりや、もちつき、お月見などの行事を通して、食べることのたのしさ、おいしさを十分に味わえる食育指導を行っている
- ○登降園は徒歩通園とし、保護者の送迎としている
- ○幼稚園教育時間終了後の希望者を対象とした「預かり保育」を行っている
- ○未就園児の親子登園や、子育て相談などをする機会として「ぴよルーム」を開設している
- ○子育て支援の一環として「園庭開放」や「親子体操」などを月に1回開設している
- ○帝京短期大学の教員と連携をとり、より良い教育が行えるよう研究会や、研修会を定期的に行っている
- ○園の行事は、幼稚園生活において、幼児が主体的・対話的で深い学びが行えるよう、

日常の保育と関連づけ発達や年齢に応じた適切な内容を計画している

Table 7. 「発達の過程」と「年間のねらい」

	発達の過程	年間のねらい
三歳児「年少組」	・保育者や、園の環境に安心感を抱き、ひとり一人のペースで 園生活に慣れ親しんでいく時期 ・基本的な生活習慣を身に付け、色々なことに挑戦しようとする時期 ・一人遊びに没頭し、遊びこむ面白さを知りながら、友だちと同じ遊びを 共有する楽しさを知る時期	◎幼稚園での生活の仕方が分かり、安心して過ごす ◎保育者や友だちと好きな遊びを存分に楽しむ
四歲児「年中組」	・園生活の流れを理解し、見通しをもって一日を過ごそうとする時期 ・健康で安全に遊ぶ方法を意識し、きまりを守って過ごそうとする時期 ・文字や数に興味を持ち、遊びに取り入れたり、視覚教材など、 身近な環境に興味を持ったりする時期 ・自分と友だちの考え方の違いに気付き、自分の意見を言葉で伝えたり、 相手の思いに耳を傾けたりする時期	◎自分の思いを伝えたり、相手の考えを聞いたりする◎体を存分に動かして遊び、安全で健康に過ごせるようになる
五歳児「年長組」	・生活習慣が確立し、計画的に見通しをもって過ごそうとする時期 ・友だちと一緒に遊ぶ中で、工夫したり、協力したりしながら 遊びを展開させていく時期 ・様々な体験を通して、気付いたり、比べたり、 試したりする面白さを味わう時期 ・健康に過ごす方法を理解し、自身の成長を意識したり、 喜んだりする時期	◎健康に過ごせる方法を学び、見通しをもって生活をする◎自分に自信を持ち、友だちの良さに気付けるようになる

Table 8. 3 歲児学年(年少組)

学年の	I期 (4月·5月)	II期 (6月·7月·8月)	Ⅲ期 (9月・10月)	IV期(11月・12月)	V期 (1月·2月·3月)
目標					
0 0	○保育者に安心感を抱	○保育者や友だちと同	○保育者や友だちと一	○自分でできることは	○自分の好きな遊びを満
◎ 幼稚	き、園生活を過ごす	じ遊びを共有する面白	緒に遊びながら、自分	自分でしようとする	足するまで遊びこむ
園者でや	・保育者に温かく受け入	さを味わう	の思いを言葉や行動で	・朝の支度や食事の準	・保育者の援助を受けなが
の友	れられ、自分の思いを理	・保育者や友だちと触	表現しようとする	備など、自分でできる	ら、生活に見通しをもって
生活ち	解され、親しみを感じる	れ合いながら、リズム	・リズム遊びや、わらべ	ことは自分でする	遊ぶ
0 2	○興味ある玩具や遊具を	遊びを楽しむ	歌遊びを存分に楽しむ	・衣服の着脱、たたみ	・正月遊びや伝承遊びに挑
仕方が	見つけ遊ぶ楽しさを味わ	・クレヨンや画用紙等、	・自分のやりたい遊び	方、しまい方を確かめ	戦する
わ 遊	う	様々な教材に触れ、描	や、感じたことを保育	やってみようとする	○保育者や友だちと自分
かびを	・保育者や友だちと一緒	いたり色を塗ったりす	者や友だちに言葉や行	○自然の素材や、楽器	たちの成長を喜ぶ
り、安安分	に室内や戸外で好きな遊	ることに面白さを感じ	動で伝えようとする	などに触れ、つくった	・出来るようになったこと
心に	びを楽しんで過ごす	る	○身近な秋の自然に触	り演奏したりする面白	や、体が成長してことを作
してし	○身支度や排せつなど保	○幼稚園での生活に慣	れる	さを味わう	品や写真で振り返り自分
過む	育者の援助を受けながら	れ始め、身の回りのこ	・散歩や遠足を通して、	・粘土、絵画、工作など	の成長に喜びを感じる
す	取り組んでみようとする	とを自分でやってみよ	植物や虫などに触れた	様々な体験をして、自	・年長児の卒園や自分の進
	・園内を探検し、遊具や	うとする	り興味を持ったりする	分の好きな遊びを見つ	級を自分なりに理解し、年
	用具、年長児の姿を見て	・身支度や排せつなど		ける	中組になることに期待感
	園生活に興味を持つ	を自分で行い、保育者		・カスタネットや鈴、タ	を持つ
	・排せつの仕方、水道の	に認められ達成感を味		ンバリンを使い簡単な	
	使い方を知る	わう		リズム遊びを楽しむ	

Table 9. 4 歲児学年(年中組)

学年の	I期 (4月・5月)	Ⅱ期 (6月・7月・8月)	Ⅲ期 (9月・10月)	IV期(11月・12月)	V期 (1月・2月・3月)
目標					
◎自分の思	○保育者に安心感を抱き	○身の回りのことを主	○制作や運動遊びを通し	○友だちや保育者と食事を	○進級することの喜びを
	ながら新しい生活環境に	体的に行い、見通しを	て、自分と友だちとの違い	楽しみ、食べることに興味を	友だちや保育者と共感す
をの思	慣れ、自分の好きな遊び	もって生活を進める	に気づき、比べたり試した	持つ	る
分い	を楽しむ	・手洗いやうがい、排せ	りする	・保育者や友だちと芋ほり遠	・年長児や年少児と関わり
にを伝	・進級児と新入児とで手	つを自分から行おうと	・夏休み明けの園生活に喜	足で掘った芋を調理し、一緒	ながら、進級することを具
かえした	遊び、簡単なゲーム遊び	する	びを感じながら友だちや保	に食べることに喜びを感じ	体的にイメージして期待
で変が、	などを楽しみ、一緒に過	○友だちと一緒に遊び	育者と好きな遊びを楽しむ	る	感を抱く
び 相	ごす楽しさを感じる	ながら、相手の考えに	・自分の体験談や、興味の	・絵本や行事、昼食時の体験	○安全な遊び方、健康な過
安の	○友だちと一緒に身の回	耳を傾けながら関わり	あることを友だちに話した	を通して食事に興味を持ち、	ごし方を理解し、意識して
安全で健康	りのことを思い出しなが	を深める	り、相手の話を聞こうとし	食べ物を大切にする感情を	行動するようになる
健康聞	ら、自分たちでしようと	・水遊びやプール遊び	たりする	養う	・園内の環境を友だちや保
康 聞 に い	する	の約束事を守って、友	○敬老の日を知り、年長者	○生活の中で自分の役割を	育者と確かめ合い、安全な
過た	・身支度や昼食の準備、	だちと存分に楽しむ	を思いやったり、敬ったり	意識し喜んで実践しようと	過ごし方、遊び方を自分た
せっすっ	片付けなどを友だちと確	・友達と遊びながら、相	する気持ちを養う	する	ちで考え共有しようとす
過ごせるよう	かめ合いながら実践し、	手の気持ちや反応を意	・高齢者施設への訪問や、	・当番活動を通して、自分の	る
うに	保育者に認められること	識し、関わり方を考え	自分の祖父母との関わりを	役割を意識し、達成すること	・手洗いやうがいの意味を
なる	で達成感を味わう	ようとする	通して保育者や友だちと一	の面白さを味わう	知り、健康な過ごし方を意
2			緒に手紙や歌のプレゼント	・ルールあるゲームやチーム	識し、やってみようとする
			を考えたり工夫したりする	での遊び、協力すること、1	
				つの目標に向かって友だち	
				と助け合う大切さを学ぶ	

Table 10. 5 歲児学年(年長組)

学年の	I期 (4月・5月)	II期 (6月·7月·8月)	Ⅲ期 (9月・10月)	IV期 (11月・12月)	V期(1月・2月・3月)
目標					
, Q	○新しい環境に慣れ、友	○友だちの言葉や表現	○友だちの意見を聞いた	○生活の流れに見通しを	○友だちや保育者と好き
◎ 自分	だちや保育者と一緒に過	に興味を持ち、自分と	り、取り入れたりしなが	持ち、自分たちで心地よ	な遊びを存分にする
にに	ごす楽しさを味わう	の違いに気づき、関係	ら、遊びを展開していく	い生活ができるように行	・クラスやグループの中
信ご	・保育者や友だちと新し	性を築いていこうとす	面白さを味わう	動する	で自分の力を発揮し、目
を せ 持 る	い玩具や慣れ親しんだ遊	る	・得意なことや苦手なこ	・健康な体作りに関心を	的をもって遊びを展開す
方法	具で一緒に遊ぶことを楽	・ルールのある遊びを	とが自分にも友だちにも	持ち、生活のリズムを整	3
友だち	しむ	友だちと楽しみなが	あることに気づき、互い	えたり、自分の食事の量	○就学への思いを友だち
たすび、	○年少児とのかかわりの	ら、自分の思いを言い	に協力する大切さを知る	を調節したりしながら、	や保育者と共有する
り見見	中で、友だちと進級した	合い、様々な個性に触	○地域の施設や人と触れ	健康な生活習慣を身に付	・一緒に過ごしてきた友
良きに	喜びを共有する	れることに面白さを感	合い、親しみを持つ	ける	だちや保育者との思い出
良さに気付	・年少児の着替えや、手	じる	・図書館や公園に行き、	○就学に期待が持てるよ	を振り返り、成長した喜
くっ	洗いの手伝いをしなが	○気温や天候の変化に	その場に適した振る舞い	う、小学校について調べ、	びを味わい、保護者や身
よてう生	ら、人の役に立つ喜びを	興味を持ち、自分たち	を意識して行動する	小学生と触れ合うことを	近な人に感謝の気持ちを
に活	感じる	のやりたい遊びを見つ	・高齢者施設に伺い、コ	体験する	持つ
るす		け、主体的に楽しむ	ミュニケーションをとり	・近隣の小学生と一緒に	・年少組との交流の体験
る		・水遊びやプール遊び	ながら親しみを持つ	遊んだり話を聞いたりし	から自信を高めたり、卒
		を存分に楽しむ		て就学に期待感を抱く	園の意識を持ったりする
		・園庭の植物や虫に興		・不安に思うことを友だ	
		味を持ち、触ったり観		ちや保育者と共有し、み	
		察したりする		んな一緒に就学すること	
				に安心する	

Kindergarten curriculum organization

—Curriculum guideline revisions and five aspects early childhood educational aims—

Hideaki MISHIMA · Ayako MIZOGUCHI

Department of Early Childhood Education, Teikyo Junior College

[abstract]

[Objectives] Kindergartens are international institutions for systematically providing education for facilitating young children's development. Kindergarten teachers support children by gaining the required experiences for self-development through spending time with children. Kindergarten curriculums are organized by content and goals based on children's life experience and development, from the perspective of the total education period, from the entrance to graduation from kindergarten. This study investigated the conditions resulting from curriculum organization.

[Methods] The authors and kindergarten teachers held several workshops to develop a common perception of curriculums and developed two drafts based on weekly and daily plans and childcare records for the past three years, one draft by the authors and the other by the teachers. After review meetings, we subsequently developed a curriculum by comparing the two drafts to confirm if the drafts expressed the goals and contents of revised guidelines appropriately, including the aims of the five aspects early childhood educational aims- and qualities and abilities to be developed in preschool education.

[Results] Discussions with teachers indicated that teachers' "goals" changed based on the "period" of each child's age. Teachers are expected to develop curriculums and teaching plans based on the goals and aims of five aspects early childhood educational aims however, focusing on a specific goal for a specific period might be more effective for achieving proactive, interactive, and deep learning.

[Discussion] Curriculums express the concrete aims and contents of education for the situation of children in each period. The authors engaged in education outside the kindergarten participated in the organizational process, and clarified the aims and contents of the curriculum by explaining the basis of educational "goals" in this study. Moreover, teachers proactively listened to others' opinions and examined their ideas' appropriateness to clarify the basis of the goals. This process resulted in cooperation among kindergarten staff and contributed to improved management of the kindergarten.

(Key words) kindergarten, curriculum, five domains